

# 解放

理工学部  
学生共闘会  
1968年  
9月13日

日刊

## 大学の自治を守れ！

大学の自治とは、いかなる権力、政治権力、宗教的権力からも教育、研究の自由を守るといふことでもあります。しかしながら、大学でも「象牙の塔」と言われるような、社会から離れてとび出すことは決してできません。それはもし我々が資本主義を否定したとしても、現体制に生きている以上、資本主義生産工程から生産される米を食い、服を着なければ生きてゆけないのと同じことです。このように体制にがっちり組みこまれた大学において、先に述べた教育、研究の自由、大学の自由を守ることが非常にむづかしくなっています。慶応大学における米軍資金による研究、日大における東レのいくつ研究等々に見られるように、現在の大学はまず産学協同、軍学協同という形で一部支配者の為だけにしか研究の自由が保障されないような状況にあるわけです。そして単に研究の面だけでなく、教育にもまさに支配者の望むよ

うな教育、すなわち何も考えない、考えることのできない小羊を育てているわけです。これは我々日大生が目を見ればにちどころにうなづけるはずですが、つまり理工学部に関心の事東がなかったと言われれば「なるほど」で終る学生がいかに多かっただけ。こせの経理を公開されて「なるほど」で終る学生がいかに多かっただけ。まさに疑問を持たない、支配者にとって素直な、良い人が作り出されてきたわけです。大学研究、教育が一部支配者のものとなっていいのであろうか。まさに現在大学は危機にあることを至るの学友がはっきりと認識し、大学を我々の手で守って行かなければならない。仮処分強制執行はまさに大学を国家権力に売りわたしたという事である。であるなら我々は、たとえ非合法にならなくても我々の手で大学の自治を守らねばならないのだ。それが我々大学人の使命であると考えます。それを身をもって示したの

我々の作った若の上に  
新しい社会が新しい大学が  
造られるならば  
我々は喜んで  
今日の苦しみに耐えたい  
新しい光よ朝の光よ  
早く早くいっときも早く  
至るの学友の上に人民の上に  
ふりそそいでく水  
至るの学友よ立ち上れ立ち上れ!!

(斗争本部黒板落書き)

が経済学部法経学部の学友であり、現在古田体制打倒を進めている日大十万人学生なのです。

至るの学友諸君、大学の自治を守り、学生権力担削ちにて、まさに大学が大学になるまで闘い続けようではありませんか。

# 批判の自由 (『よびにをたすべし』一三)

自由とは、偉大なことばである。しかし、産業の自由という旗を掲げたとしても、とまげ強制的な戦争がおこす小水たし、劣劣り自由という旗を掲げたとしても勤労者は踏躓されてきたのである。批判の自由といふことばの当世の使いかたにも、これと同じ内面的な虚偽がこぼれている。自由の年で科学を前進させたといふ真に確信している人なら、古い見解とならぬので新しい見解の自由ではなしに、古い見解を新しい見解でおきかえることを要求するはずである。ところが「批判の自由万歳」という当世の叫びには、あまりにも虚偽の感情をこぼしてあるものがある。

われわれは、かたく手を握りあひ、獲集した一団となって、けわしい、困難を造るすむ。われわれは、四方に敵に包圍されておられ、ほとんどいつも、敵の銃火をながむがうすすまはれはならない。われわれは自由を恣意にもとづいて闘争したのだが、それはまさに敵にたたくため、そして、庭がたはすうし隣の沼地におちこまなためである。その沼地の住人たちは、われわれがわかれ別個の集団をつくり、妥協の道をすてて斗争をえらんたというこゝで、最初からわれわれを非難してきて、ところが、いまわれわれの仲間の一部のものが、その沼地へゆこうととさげははじめているのだ。

——そして、人が彼らをたしなめたりと返らばいにかみ分のだ。忍たまはなして時代おくれの人間をのたせしめて、もことばに遠く君たら多ぶる自由をわれわれに分とめなさいなして、忍たらは主人取しらすらうらうら。

学生諸君と編輯者といふことばで、再びわれわれは、暗黒の沼地(古田体制)へ向へてははいて、われわれの自由とは、まさに古田体制を徹底的に打倒する自由であり、又、古田体制破壊後の新なる大空内下の自由である。学生諸君と古田体制の中には一点の光もなき暗黒の世界であることを確信し、絶対に沼地へ向かわないことを古田に宣言しよう。

# 実践論(その三) 毛天東

解放区等の実践地を再度まよめてみる。つまり、認識の過程の第一歩は、外界の事物に接触しはじめること(実践)であり、それは感覚の段階である。感覚的認識といわれるものが、この段階である。第二歩は、感覚した材料を統合して整理し改造することであり、それは概念、判断および推理の段階である。ただ感覚した材料が十分に豊富で(断片的でない完全な)、そして、実験と一致している(錯覚がなく)はあいにだけ、それらの材料にまよづいて正しい概念と理論をつくりだすことができる。

まよに述べたことを再度くりかえすと、第一に、理性的認識は感性的認識に依存するといえる。つまり、われわれが認識過程における社会的実践の意義を強調するのは、社会的実践によつてのみ人間の認識が發生しはじめる。客観的外界からの感覚的経験が得られはじめてからである。眼をとり耳をこらして客観的外界からまよに絶縁して人間には認識の問題にはならない。認識は経験にははじまる——これは認識論の唯物論である。

第三に、認識はなお深くまよにわれわれはなれないということ、つまり、認識の感性的段階はさらに理性的段階に発展しなればならないということである——これは認識論の開証法である。つまり、現象に事物の全体を反映し、事物の本質を反映し、事物の内部的側面性を反映すためには、いかにけななものをすてて確定なものをとり、深にまよにすてて真実なものを獲し、一一のものから他りものへ、表面的まよから内面的まよへ進行ながら、思考作用を通つて豊富に感性的材料に改造と製作の手続きを加えて、概念および理論の体系をつくり、感性的認識から理性的認識へ躍進しなればならない。

理性的認識は感性的認識に依存し、感性的認識はさらに理性的認識にまで発展しなればならない。これは唯物論的唯物論の認識論である。 づぐく